

## 脱ダム新時代を迎えて

コンクリート重力式ダムが日本で造られ始めて120年余。今や既存ダム2,752基（『ダム年鑑2018』）に及ぶ。大義名分に、①利水（発電・上水道・灌漑）、②治水（洪水調節）、③環境維持用水などを据える。これらを巧妙に組み合わせた多目的ダム建設が主流になり、予算膨張とダム反対運動の分断を図る。そして、公共性をかざし、「ダム完成でもう安心」という神話を仕立て上げてきた。

その背景に1961年制定の水資源開発促進法がある。河川を水資源とみなし、合理的に収奪する鉄とセメントの工作物＝ダムが河川を席卷した。この結果、河川水を堰き止めて人造湖に貯水することから健全な水循環や自然生態系を破壊する“ダム公害”を各地に引き起こしている。

湖底深く土砂の堆積が進行して、上流域に洪水を起こす。土砂の供給不足が海岸浸食をもたらしてテトラポットの海浜が目立つ。ゲリラ豪雨が頻発する昨今では、ダムサイト本体を守る「緊急放流」で下流域住民の命を奪う惨劇を招き、“ダム安全神話”が揺らぐ。にもかかわらず、ダムに頼る経済成長の呪縛は解けていない。

このままでは河川が“ダムの墓場”と化し、上・下流を問わず厄災の元凶になるとの危惧を抱く。推進側の専横もあって、全国26カ所でダム建設計画に反対する地域闘争がある。

67年間の反対運動があったハッ場ダム（群馬県：総工事費5,320億円）は今年3月に竣工したが、「石木ダム」（長崎県）では住民の土地・家屋等を強制収用した暴挙が現在も進行中だ。住民パワーでダム建設を阻止した里は、気仙沼「新月ダム」、京都「鴨川ダム」など11例（休止を含む）しかない。

計画中止のダム数は名目298カ所。そのほとんどは陽動作戦で地域分断を図るダミーであった例が多い。もう国土にダム建設の適地はない。老朽の既存ダムの少し下流に、より規模の大きい新ダムを建設して、その新たな人造湖に古いダムをそのまま「水葬」する手管が使われ始めている。

こうした「ダムはムダ」に呼応するように、熊本県は6年の歳月と84億円をかけて、2018年に球磨川の「荒瀬ダム」を撤去する工事を完成させた。わが国初の偉業である。

どれほど、森と海の“悠久よりの愛”が深まったかを検証するため、現場から河口の八代海までを取材した。すでに荒川中流の玉淀ダム（埼玉県）など全国4カ所で撤去運動に拍車がかかっている。

やがて、自然再生の「脱ダム新時代」の幕がひらく。

矢間 秀次郎（プロデューサー）

### 各地のダム問題とその功罪 現地で生活する人びとの思い



本映画の上映会を開催して下さる方を募集しています。

貸出条件や上映会のお申込みについては、上映委員会・矢間までご連絡ください。

〒184-0012 東京都小金井市中町2-5-13

TEL・FAX: 042-381-7770

E-mail: h-yazama@oregano.ocn.ne.jp